

## 森達也さんプロフィール

映画監督／作家。1956年広島県呉市生まれ。1986年テレビ番組制作会社に入社。デビュー作は小人プロレスのテレビドキュメント作品。以降、報道系、ドキュメンタリー系の番組を中心に、数々の作品を手がける。1998年オウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画『A』を公開。2001年、続編『A2』が、山形国際ドキュメンタリー映画祭で特別賞・市民賞を受賞。その後はテレビ東京の番組『ドキュメンタリーは嘘をつく』などに関わる。現在は執筆が中心。

## 森 達也さん講演

## 「ホントのこと」って、なあに？

～ドキュメンタリーの嘘とリテラシー～

【主な著書】『放送禁止歌』(光文社知恵の森文庫), 『ドキュメンタリーは嘘をつく』(角川文庫), 『世界はもっと豊かだし、人はもっと優しい』(ちくま文庫), 『いのちの食べかた』『世界を信じるためのメソッド』『きみが選んだ死刑のスイッチ』(理論社), 『日本国憲法』(太田出版), 『ご臨終メディア』(集英社)など多数。

と き 2010年10月16日(土) 13:00～17:00

13:00～15:15 映画『A』上映  
15:30～17:00 講演

ところ フォレスト仙台ビル2F 第1・2会議室

参加費 300円

森達也さんは、マスメディアの自主規制、死刑、陪審員制度の問題、賭殺、戦争、憲法など多岐に渡り発言しています。

ハッとさせられるのは、森さんのそれらを読み解く「視点」や「枠組み」。映像作家である森さんの話を聞きながら、私たちの「視点」や「枠組み」を問いなおしてみませんか。ぜひ、ご参加下さい。

【問い合わせ】 電話 022(271)8290 FAX 022(234)3481  
メールアドレス stu@poplar.ocn.ne.jp

# 過剰な警戒、かえって不安増す

映画監督・作家 明治大客員教授

森達也さん

1956年生まれ。オウム真理教のドキュメンタリー映画「A」「2」を監督。著書に「死刑二下山事件」のちの食へかた」など。

監視カメラ設置の大前提は、「治安が悪化して危険だ」ということ。しかし、昨年の殺人事件の認知件数は1094件。戦後最少の件数です。殺人事件の検挙率は98.2%という高さ。刑事犯罪全体も7年連続で減っている。つまり日本の治安は悪化などしていない。

監視カメラは犯人検挙に多少は役立つとしても、防犯効果はどうか。世界屈指の監視カメラ大国イギリスでは、駐車違反を減らす効果はあったが、それ以外にはさほど効果はなかったことを内務省が認めている。軽微な犯罪は減っても、凶悪犯罪が劇的に減るとは思えない。

以前に訪ねた地方都市は「安全・安心」に熱心で、街中にカメラが設置されていた。市のサイトには「不審者情報」のページがあり、「公園で子どもが遊んでいたら、男がニヤニヤ笑ひながら近づいて、話しかけてきた。50代くらいで作業服

を着ていた」といった情報が載せられていた。でも「ニヤニヤ」でなく「ニコニコ」だったら、ただの「子ども好きのおじさん」です。つまり情報は視点によってどうにも変わる。これを認識しないと危険です。必要以上にセキュリティの強化

が叫ばれるようになったのは1995年の地下鉄サリン事件以降です。不特定多数に対するテロでした。だから自分も被害者になったかもしれないとの被害者感情が、メディアによって日本中に伝播された。

もう一つの要因は、まともな精神鑑定がないまま一審判決が確定した麻原裁判が典型で、オウムへの憎悪と排除の意識が事件の動機や構造の解明より優先したこと。動機がわか

らなければ恐怖は消えません。だから「オウムの人が強いセキュリティ」を求め、不安だから集団化が促進され、悪を排除せよとの意識が高じて死刑も含めて厳罰化が加速した。

不安な意識状態に陥っているからこそ「危ない」とか「怖い」とかの声に民意は過剰に反応するようになり、メディアは飛び上げを伸ばすために、不安や恐怖をさらにあおる。皮肉なことに、あふれる監視カメラやテロ警戒中の表示は、人々に安心感を与えません。逆に、あらゆる所に潜在的な犯罪の危険があるという不安を高めてしまう。魚のスパイラルですね。そうなる人々は、見えない危険を可視化しなくなる。

この数年「自己責任」や「KY」といふ言葉に象徴されるように、集団の動きに逆らう因子は排除する傾向が激しくなっている。ほとんどの駅や公園のベンチに仕切りが入るよ

うになった理由は、ホームレスが横になれないようにするためです。でも、害のないスギ花粉を排除しようとして過剰な免疫反応を起こしてしまふ花粉症のように、過剰なセキュリティは体を壊すんです。

刑務所から出所しても、社会に受け入れられず、また犯罪に走ってしまうケースも多い。千葉県松戸市の女大生殺害事件の容疑者もそうでした。排除と厳罰化によってリスクを排除しているつもりが、逆にさがるリスクを生み出してしまふ。

去年、テレビの取材でノルウェーに行きました。街には監視カメラなんかなく、警察官もほとんどいない。死刑はもちろん無期懲役もない。ところが、治安の良さは世界でもトップクラス。人口は約480万で、08年の殺人事件による死者は27人です。実は日本も同程度に治安は良いのだけれど、国民の意識はまったく違います。ノルウェーは、セキュリティ強化ではなく寛容化によって、より良い治安を実現した。刑期を終えて出所する受刑者は、政府が住居や職についてフォローするシステムが完備されている。ならば再犯率は下がって当然です。

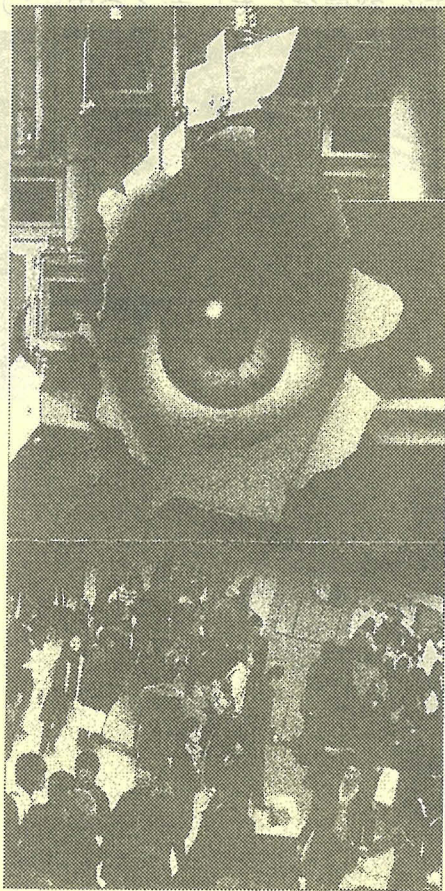
監視カメラにかける費用を、出所者の自力更生や社会復帰支援のために使えば、犯罪はもっと減るはずです。大切なことは監視や排除ではない。「安全・安心」を本当に求めるなら、監視カメラはその機能を果たしません。（聞き手・尾沢智史）

## ● 上映作品「A」について

1994年の松本サリン事件や1995年の地下鉄サリン事件などで日本中を震撼させたオウム真理教（現・アールフ）。本作は、教団の広報担当者・荒木浩に密着取材し、「なぜ事件が起きたのか？」ではなく「なぜ事件の後も信者で居続けるのか？」という点を追求していくドキュメンタリーである。その中からオウムのみならず、彼らを糾弾するマスコミや現代社会全般に対しても鋭いメスを入れていく衝撃的問題作でもある。

監督の森達也はTVディレクター時代に、オウムを絶対的悪として描くよう強要するプロデューサーと衝突して契約解除され、以後自主製作として本作を完成させた。観ているうちに、今自分が日本人として日本で生活していることまでも改めて考えさせられてしまう意味でも、必見作といえよう。

(Amazon.co.jp 作品説明をもとに)



コラージュ＝羽生春久

**監視カメラ** 2008年度のカメラや記録装置など映像監視装置の売上高は1855億円（日本防犯設備協会による）。警察の「街頭防犯カメラ」は10都府県で363台、監視カメラや通報用インターホンを備えた「スーパー防犯灯」は全国で546基が設置されている（09年3月末現在）。

朝日新聞（2010.4.16）より